

解答

問一 いつもは、障がい者であることで人に気をつかわせるが、今回はぼくが車いすに乗っていなかつたため健常者と思われ、要らぬ気づかいを受けず、自然に接してくれた。

問二ひとりで散歩に出かけ、車いすがなければ出会った人に健常者だと思われるという体験をして喜んでいたが、ひとりで帰ることはできず、人の助けがなければ何もひとりでできないと思い知り、落ちこんでいるというふうに思つた。

問三 カウンセラーは、ぼくの気持ちを理解しているようなことを言うが、いちばん悩んでいることはわかつてくれず、結局はひとことなのだといらだちを感じている。

問四 ぼくが大きな冒険にいどみ、自分を乗り越えようとしていたのに、友だちはのん気にふざけたりして楽しそうにしていたと聞き、彼らのようにできるだけ楽しくしているのが正解なのかもしれないと思ったから。

問五 ぼくを助けが必要な存在と見る母さんとちがい、父さんはぼくが自分でできることには手を貸さず、自立したいという気持ちを静かに見守ってくれ、息子の一人として誇りに思い、これから成長を楽しみにしてくれる存在。

二

問一 一枚の「絵」を通じて感じるのは、鑑賞者も画家もその時々の心理状態や身体のコンディションによって変化するものなので、何度も何度も一点の絵と向きあうことが大切であるから。

問二 何度も好きな絵、美しいと感じた絵と向きあうことは、想像力・創造力・空想力・喚起力といった生活を豊かにするために必要な能力を発達させ、人間や物のもつ真の価値を見極める美の物差しを鍛えることになるから。

- 三
- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|----------|
| (1) 高層 | (2) 拝観 | (3) 護衛 | (4) 適切 | (5) 玉石混交 |
|--------|--------|--------|--------|----------|

解説

一

問五 母さんは「ぼく」を「あかちゃんあつかい」し、「ぼく」の存在のために疲っているが、父さんは「自分自身に勝つてことは、どんな勝利より価値があるんだ」と「ぼく」の成長を認めてくれ、「ぼく」は、「父さんの言うとおりだ。前ならとてもできないと思っていたようなことが、ここ二ヶ月でたくさんできるようになった。これからだつて、もつといろんなことができるようになるかもしれない。」と気持ちが明るくなっています。また、散歩の支度をする「ぼく」に父さんは手を貸さず、「じつと待つてくれた。うれしかつた」とあります。自立を見守つてくれる父さんの態度によつて「ぼく」は自信がもてるようになつていく様子が描かれています。

二

問二 続く部分で「何度も好きなものと出会う、自分が美しいと感じたものと出会う」というトレーニング」は、「想像力」「創造力」「空想力」「喚起力」といった感性、人間の生活を豊かにするための、もつとも必要な能力を発達させるトレーニングでもあります。」とあり、それは「人間や物のもつ真の価値を見極める、あなた自身の美の物差しを鍛えるトレーニングである」と述べられています。